

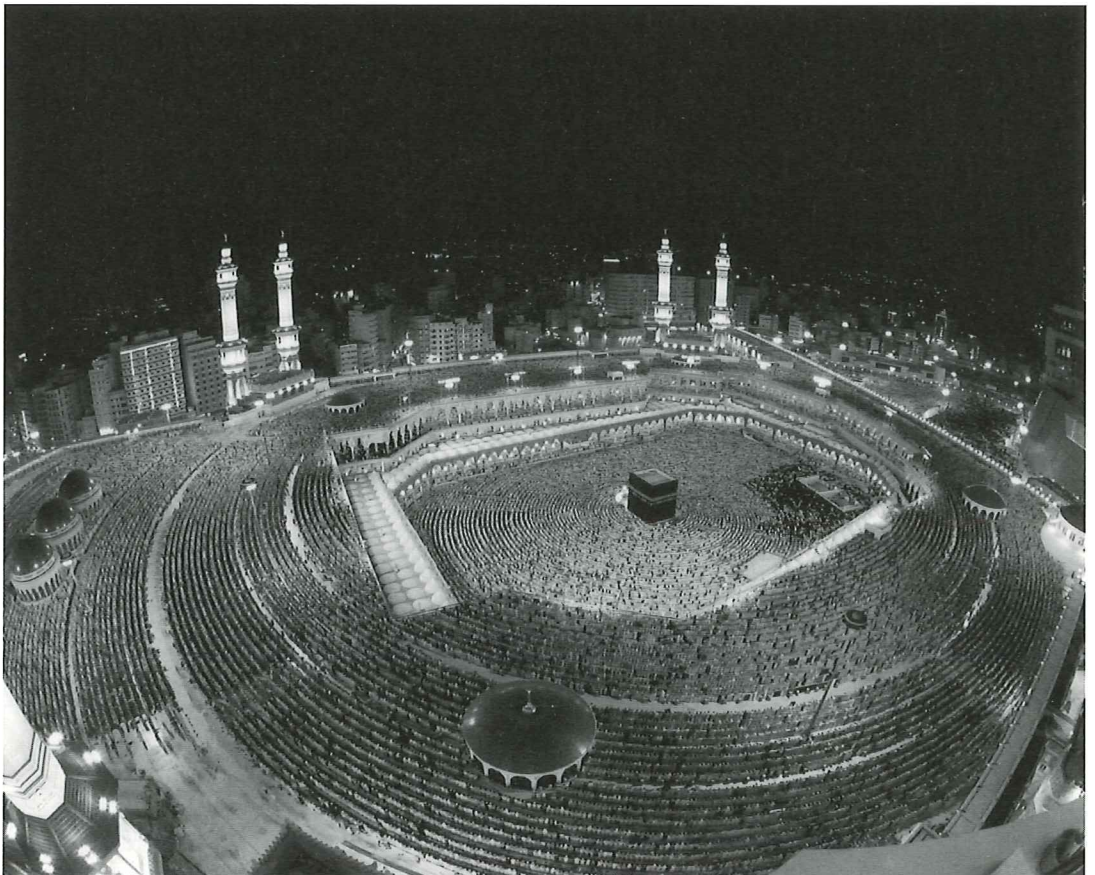
# 生かされてくることの自覚

野町和嘉

*nomachi kazuyoshi*

四十数年に及ぶ私の写真家人生のなかで、  
脳裏の深層にもっとも焼き付いているシーン  
といえば、一九九五年のラマダン月に遭遇し  
た、百万人が夜を徹して行うライラトル・カ  
ドルの礼拝であらう。

場所はサウジアラビアのメッカ。イスラーム  
発祥の地であり、世界十四億人のイスラーム  
教徒にとって最高の聖地である。そもそも  
異教徒の立ち入りを厳しく禁じている聖地メ  
ッカでの撮影が可能になったのは、サウジア  
ラビアから私あてに、直々に撮影依頼が届く  
という希有の機会を得たからである。



写真：野町和嘉「ライラトル・カドルの礼拝」

聖モスクにそそり立つ地上九十六メートルのミナレット（光塔）のテラスに立ち、カバ神殿を囲んで同心円状に層をなした大群衆が、大音量のスピーカーから流れる導師の「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」の号令を合図に、一糸乱れずに額（かぶ）ずく動きを見下ろしながら、もしかしたら自分が今立っているのは「神の視座」ではないのかという畏れと戦慄を感じたほどであった。

ミナレットへは、初め警備員が同行していたが、私一人を残してすぐに降りていってしまった。夜空に朗々と響きわたる、神憑（が）っているとしか思えぬ導師のコーラン朗唱に呼応して、延々と繰り広げられる礼拝を、ただ独り眺めていた。そうして納得したことは、このかたちこそが、ヒトの誕生以来、精神的放浪の果てに到達した、神への服従の到達点であるということだった。

ライラトル・カドルとは、「召命の夜」もしくは「定めの夜」を意味している。メッカ郊外のヒラー山頂の洞窟に籠もって瞑想していたムハンマドに、ある夜、突如として神の啓示が下されたのである。それは有無をいわずに暴力的ともいえるかたちでムハンマドをとらえ、メッカの一人人は、唯一神アッラーの啓示を伝える預言者として召命されたのであった。ムハンマド四十歳。西暦六一〇年、ラマダン月二十七日目の夜のことであったと

されている。メッカでのライラトル・カドルの祈りは千月の祈りに相当するといわれ、この夜のために、世界中から巡礼者が殺到しているのである。

イスラームの教えでは、アッラーとは、永遠の彼方にあつて全宇宙を司る唯一絶対の創造神である一方で、各人の頸椎（けいつい）に張りつきその行動を見守っている、人知を超えた存在なのである。

さて、聖書やコーランが説く神のかたちや人間との関係性が、古代からの創作神話の集成に過ぎないことは今や誰もが承知している。世界が七日間で創造される過程で、神のかたちに似せて人間が創造されたわけではなく、億年単位の苛酷な生命淘汰（たうた）を生き延びて、この複雑な頭脳を獲得した人間の姿が形成されたことを知っている。現代科学は、宇宙の生成から脈々と受け継がれてきた生命の軌跡のごく一端を明らかにしたに過ぎないが、それでも生命の不思議に畏怖の念を抱かないわけにはいかない。

一方で伝統宗教がその教義をもとにかたちにした聖なる空間に身を置くと、信者であるか否かにかかわらず、おもわず魂を鷲（たけ）つかみにされ、あるいは癒された経験をもったものも少なくないはずだ。つい三ヶ月前のことであるが、イタリア・ローマ市内を散策中のこと、ふと立ち寄った古めかしい教会で、薄

闇のなかクーポラ（丸天井）から射しこむ一条の光に向かつてキリストの昇天を描いた祭壇と向き合う機会があった。生きとし生けるものの永遠の救済をかたちにした空間にわれを忘れてしばし見入ったことだった。

あるいはインド・バラナシを流れるガンジス河岸の早朝。沐浴（そくよく）をする信者たちの祈りに満たされた深い流れのはるか対岸の地平から、淡い霧の彼方に昇り始めた朝日の輝きに触れながら、この大地に生かされていることの至福が唐突にこみあげて、心洗われたことだった。大河の流れのごとく、生命の輪が永遠に巡り続けているとするインドの信仰になんら違和感をもたなかった。

われわれの遠い祖先が森からサバンナに出て二足歩行を始めたことで、デリケートで壊れやすいこの頭脳を獲得して、ヒトはアニマルには戻れない弱い生きものになってしまった。いったい自分がどこから来てどこに行く存在なのかという永遠の自問を背負わされてしまったのである。人生とは、心を預けることのできる何かとの二人三脚の歩みなのである。その歩調の乱れから躓（す）いたときに、同行者の存在に初めて気づかされるのである。そして誰もが平等に、死によってこの舞台から退場し、遠い祖先に列なつてゆく。

（のまち かずよし・写真家）  
著書に『異次元の大地へ』クレヴィス